

都・建設予定地 生活記 (17)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕の生活記。

たいていの大学と同じように、僕が仕事をしている大学にも文房具屋が入っている。もちろん、文具の購入だけでなく、日用雑貨、携帯料金の支払、印刷や製本、その他諸々を一手に引き受けている。インドではありがちな光景だ。カウンターの向こうでは仕事をサボる奴がいて、面倒くさそうに対応する奴もいて、その中でひとり、やたらテキパキと仕事をこなす男がいるというのも、やはりよくある状況だと思う。

うちの大学の文房具屋にいるテキパキ男は髭面の長身だ。店内のあらゆる商品の場所を把握しており、目にも留まらぬ速さで印刷物のホチキスを留め、お昼休みには外にまで溢れかえる学生を次々さばいている。中でも書籍やノートの丸々一冊コピーが彼の得意技であり、「ページをめくり、コピー機に置いて、コピーボタンを押す」というその一連の流れは見事なまでに最適化されていて、毎度あつという間に仕事を終えていた。学内にある学生が使用可能なコピー機は文具屋にしかないのだが、混みあいながらもさばけていたのは、そいつのおかげだと言って過言ではなかった。この働きぶりではほかの店員と、同じ給与なのだろうか、いらぬことまで僕は考えた。

僕はそいつと仲良くやっていた（仲良くやっていたと言いながら、名前すら知らないけれど）。印刷を待ってちょっと暇な時にはよく話をして、そいつもまた、ホステルの警備員と同じようにかつてはグジャラート語の先生でもあった。冗談も言うが、下品ではなく親しみやすいものだったし、それ以上に「店員と客」という関係を超えないような会話ばかりだったので、話していて素直に楽しむことができた。

学生に配るプリントやテストなどは、ほぼすべてここで印刷していたので、印刷の待ち時間はかなりあった。この大学に来て二年以上になるので、きっと合計で一万枚以上は印刷しているはずだ。いくら印刷とホチキス留めが職人技だとはいえ、それでも短くはない時間をその男と話した。

先日、コピー屋からその男がいなくなった。「村に帰った」とほかの店員は言った。それが辞めたという意味なのか、長期休暇という意味なのかはよくわからなかったが、コピー屋はかなり混みあうようになっていて、それ以上は聞くこともなかった。代わりに入った新しい子二人があまりにも遅く、店にはやたらと人がいた。申し訳ないが、僕も大学の外に出た時まとめて印刷してしまうことも多くなった。

だがここ最近、前からいた男の子が本気を出して色々な仕事をこなすようになってきた。そんな速さでできるなら前からやれよ、と思わないでもないのだが、ホチキス留めも印刷

も毎度毎度ちょっとずつ早くなっている。前にいた「そいつ」が帰ってこずとも、職人技復活の日は近いのかもしれない。

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。